追憶—日米セミナーに宮崎さんを偲ぶ

The Memory of Dr. Hiroshi MIYAZAKI in the United States—
Japan Seminar on Analytical Biomedical Mass Spectrometry中田尚男^{1, 2*}
Hisao NAKATA^{1, 2*}¹ 元日本質量分析学会会長 *A One-time President of the MSSJ*² 愛知教育大学名誉教授 *Professor Emeritus of Aichi Kyoiku University*

1975 年（昭和 50 年）は、わが国におけるマスマススペクトロメトリーの歴史にとってエポックメイキングな年であった。一つは、立松 晃・宮崎 浩・鈴木真言の 3 氏の共著による名著「医学と薬学のためのマスマススペクトロメトリー」が出版されたこと、そしてもう一つは、「日米セミナー」という、当時としては画期的な会議が開催されたことである。それと相前後して私は宮崎さんと知り合いとなったので、以後数十年にわたってたいへん親しくしていただいたことになる。

1975 年といえば、「有機化合物のマスマススペクトロメトリー討論会」が発足からすでに 10 回目となっていたし、この年のちょうど 1 年前、現在の BMS コンファレンスの前身である「臨床マス談話会」も始まり、Organic & Biomedical Mass Spectrometry が全盛期を迎えようとする時代であった。そんなある日、名城大学薬学部の故立松 晃教授（所属ならびに役職名は当時のもの、以下同じ）から電話があり、今度アメリカの研究者を何人か招いてセミナーをやりたいのだから手伝ってくれないか、とのことであった。詳しく聞いてみると、日米双方から 10～15 名程度のメンバーを選び、4～5 日間どこかに泊まり込みでいろいろ議論したいのだという。もちろん喜んでお手伝いをお引き受けした。

セミナーのタイトルは United States–Japan Seminar on Analytical Biomedical Mass Spectrometry、会場は箱根のホテル小涌園と決まった。日本側メンバーは、セミナーのタイトルからわかるとおり、主にバイオ関係で活発な研究をなさっておられる方々を中心としながらも、物理化学系の土屋利一さんや土屋正彦先生、量子化学の立場から有機分子のフラグメンテーションについて独特の考え方を展開しておられた広田鋼蔵先生など、その当時の錚々たるメンバーであった。米国側の人選については、宮崎さんや池川信夫先生がよく知っておられた E. C. Horning 先生にお任せし、研究者でもあった奥様の M. G. Horning さんを含め 10 名のメンバーが選ばれた (Table 1)。Horning 先生ご夫妻や、J. L. Franklin 教授、M. S. B. Munson 教授などの著名なベテラン研究者のほか、K. Biemann, J. A. McCloskey, D. M. Desiderio, C. C. Sweeley の各先生のような、当時はまだ若手のバリバリの人たちが参加することになったわけである (写真 1)。有機系の F. W. McLafferty 教授が入っていないのが少し気になったが、たまたま来日のご都合がつかなかったのかもしれない。なお、以上の正式メンバーのほかに、20 名ほどの方がオブザーバーとして参加者名簿に名を連ねている。

こうして、この日米セミナーは 1975 年（昭和 50 年）11 月 16 日（日）の夕方から 20 日（木）まで、延べ 5 日間にわたって繰り広げられたのである。毎日、午前・午後ともに熱い議論が行われた。プログラムの詳細やそれぞれの発表に対す

Table 1. アメリカ側の参加メンバー

J. L. Franklin	Rice University
E. C. Horning	Baylor College of Medicine
M. G. Horning	Baylor College of Medicine
K. Biemann	Massachusetts Institute of Technology
C. C. Sweeley	Michigan State University
J. A. McCloskey	University of Utah
P. Klein	Argonne National Laboratory
D. M. Desiderio	Baylor College of Medicine
M. S. B. Munson	University of Delaware
M. E. Wall	Research Triangle Institute

This paper is dedicated to the memory of Dr. Hiroshi Miyazaki.

*日本質量分析学会名誉会員

略語, BMS: biological mass spectrometry

写真 1. セミナーのメンバー

後列, 向かって左から 5 人目が宮崎さん. なお最前列には, アメリカ側責任者の J. L. Franklin と E. C. Horning をはじめ C. C. Sweeley, P. Klein, 日本側の中心となられた土屋利一, 立松 晃のほか鈴木真言, 土屋正彦らが並んでいる. 中段には上野民夫, K. Biemann, J. A. McCloskey, 南原利夫, 中川有造, 松本 勇, M. S. B. Munson, 馬場茂雄, 池川信夫などのお顔が見える. 後列は宮崎さんのほか丸山悠司, D. M. Desiderio など (以上いずれも敬称略).
なお, 後列左から 3 人目が筆者 (中田尚男).

写真 2. 宮崎さんを囲んで
腰掛けている宮崎さんを中心に, 左から筆者, M. S. B. Munson 先生, 鈴木真言さん, 立松 晃先生.

る討論の内容については詳しく述べないが, 参加メンバーが比較的少人数のため遠慮なしに本音で意見を言い合うことができ, 最終日には Round Table Discussion で全体の総括を行うなど, 極めて有意義なセミナーであった.

毎日のセッションは毎朝 9 時から始まり夜まで続く. 特に夜は自由時間で, 各人が個人的に相手をつかまえて自分たちの仕事についての議論. そんな時, いつも中心になって大声で議論していたのが宮崎さんであった (写真 2). 夜遅くまでの討論ではどうしてもアルコールが入るので, 次の朝はなかなか起きられない. しかし米国のメンバーたちは元気いっぱい. 私など「おい, ナカタさん, バスへ行こう!」と, 毎朝 Desiderio さんに起こされる始末だった. 大浴場へ行ってみ

写真 3. Sayonara Banquet
全員ゆかたと着物での勢揃い。最後列、左から 6 人目が宮崎さん。

ると立松先生や宮崎さんが悠々と湯船につかっているということもしばしば。素っ裸で入る大浴場が外国人には珍しいのか、本当にみんな日本の風呂が気に入ったようだった。

夜のセッションは、各自それぞれの議論が終わると、第一夜が日本側主催のレセプション、2 日目の夜が米国側主催の懇親会であった。そして最後の夜は Sayonara Banquet として、参加者全員が「ゆかた」や着物姿で大広間に集まっての大宴会。米国からの参加者たちは、ご婦人方も含めて思いのほかきっちりと「ゆかた」や着物を着こなし、畳の部屋に座っての会席(写真 3)。主なメンバーが一人ひとり簡単なスピーチを行うことになったが、セミナーの感想あり、コメントあり、ジョークありで、賑やかな会となった。シャンパン、ビール、お酒、焼酎、ワインと、血中アルコール濃度が高まるにつれて会はしだいに盛り上がっていったが、なかでも圧巻だったのは、宮崎さんなど薬学系の先生方が一列に連なって唄いながら練り歩く「薬学踊り」。われわれのような生真面目？な理学部系の者にとっては、あっと驚くシロモノであった。ほとんど全員が笑いこけ、そのユニークな仕草は外国人たちにも大受けした。しかし歌詞の日本語が米国のご婦人方にはわからなかったのが幸いであった。私にはとても通訳できない。

こうして、大成功を収めたこの 5 日間の日米セミナーは、ある意味でわが国のマスマススペクトロメトリーの歴史における画期的な出来事であったと思う。

この日米セミナーのみならず、日本質量分析学会の総合討論会や BMS コンファレンスなどさまざまな学会で宮崎さんにお会いするたびごとに、研究上の疑問点を互いに議論し合い、またマスマススペクトロメトリーの現状や将来などについても酒を飲みながら本音で語り合ったことが懐かしく思い出される。常々宮崎さんは、「私はいろいろと混ざりものの多い試料を何でも扱うヤクザみたいなものだが、あんたは簡単な構造の純粋な化合物を測定しては理屈をこねるのだから二本差しだね」と言っておられた。ヤクザに対する二本差しという意味はよくわからないが、おそらく応用的な研究と基礎的な研究との間のギャップを皮肉って言われたものと理解し、常にその両者の関係を念頭におき、お互いの立場を尊重しながら議論したものである。いつも決まって夜 8 時過ぎにかかってくる長いながい電話には、構造式やフラグメンテーションの矢印を書くための紙と鉛筆を欠かすことができなかったが、今はもう、それも思い出となってしまった。

宮崎さんの鋭い洞察力に基づいた発言やその活動的な行動がわが国のマスマススペクトロメトリーのレベルアップに大きく寄与したことは疑う余地もない。あの独特な話し方、あのよく透る低音のお声を、もはや聞くことができないのは本当に残念である。いつもいただいていた美しい毛筆のお手紙を大切にしながら、心よりご冥福をお祈りしたい。